

FCT第22回メディア・リテラシー研修セミナー報告

FCTでは第22回メディア・リテラシー研修セミナーを、8月24日（土）～8月25日（日）に早稲田大学早稲田キャンパス3号館で開催しました。

参加者は首都圏を中心に、青森県、栃木県、愛知県、京都府、大阪府などから20人が参加し、所属は大学生・大学院生、教員、会社員、NGO・NPO関係者などです。年齢も20代から70代までと幅広く、多様な参加者層ならではの豊かな学びの場を築くことができました。

●プログラムの概要～各セッション担当者による報告（1日目）

セッション1. 私のメディアアクセス（担当：田島知之）

セッション1では、常に意識しているとはかぎらないメディアと私たちの関係について、ある「普通の」一日のメディア接触を「メディア日記」のかたちで振り返りました。どのメディアとどのくらい、どのように接していたかを各自で書き出したあと、背景の異なる人たちとグループで話し合いました。世代によるメディアとの関係のちがいや、スマホがいかに欠かせないものになっているか気付いたという声が出ていました。

セッション2. メディア・リテラシーを学ぶ（担当：田島知之）

セッション2では、『最新 Study Guide メディア・リテラシー【入門編】』（リベルタ出版）をもとに、定義、基本概念、研究モデル、学び方といったメディア・リテラシーの基本的な考え方についての概説がありました。

セッション3. CMで学ぶ映像言語（担当：藤井玲子）

セッション3では、メディアがどのような映像言語で構成されて、意味を作り出しているかを学ぶのが目的です。まず映像撮影・編集用語（スタディ・ガイド p.157）を確認し、このような映像言語がどのような意味を作り出しているかをコカ・コーラのCM「熱さのリレー編」を取り上げて、グループでの分析活動を行いました。

映像技法と音声技法に分けて分析しましたが、カットが素早く、様々な夏のスポーツをドローンの動きを模した躍動的なカメラの動きと、ポップな若い女性の明るく楽しい歌声、若い男女のリレーで繋ぐようなナレーションで、暑さの中でのスポーツと熱く熱中する若者を高校生が応援する場面を構成しているという意見が出ていました。そして、2020年の東京オリンピックの聖火ランナーの募集を通してコカ・コーラが協賛企業であることを示していたので、オリンピックのワールドワイドパートナーやオフィシャルパートナーなどについて概観をしました。また、日本の広告費の総額や媒体別内訳、民放テレビ局の収入に占める広告収入の割合、雑誌・新聞・テレビ・ラジオの広告にはどのような業種が多いのかといった現状の産業面での資料も添付しました。参加者の多くの人たちの年齢とこのCMのターゲットとする層の年齢が近かったので、豊かで多様な読みが見られたと思います。

セッション4. ニュース報道は「現実」をどのように構成するか（担当：西村寿子）

1. セッション4のねらい

事実をそのまま伝えているように見えるニュースも実は、入念に構成されています。セッション4では、具体的な分析活動を通して基本概念1、2を理解することを目的にしました。

7月21日に投開票が行われた第25回参議院選挙報道について、8月1日の「初登院の日」をテキストにして、「初登院の日」のニュース番組が何を取り上げていて、何を取り上げていないのかを分析しました。

2. 分析対象：2019年8月1日参議院初登院の日

テキスト1 2019.08.01(木)21:00~22:00 NHK総合ニュース9『今日招集臨時国会』(6分10秒)

テキスト2 2019.08.01(木)22:00~23:15 朝日放送報道ステーション

「あの人も、この人も決意を胸に 令和初の国会召集」(11分42秒)

3. グループの発表から

・テキスト1では新人議員、復帰議員、車椅子の議員を登場させて、「障害」を強調する順序になっている。インタビューでも特定枠で当選した船後議員、木村議員は体調の部分を取り取り、他の議員のように何をやりたいかなど「抱負」の部分は取り上げていない。2人の議員の登場について、議場の工事を取り上げて、暗い色のテロップを使用している。重度の障害を持つ議員を迎えるのは、「めんどうだ」というメッセージか。カメラワークも車椅子の議員を上から捉えるなど、上下関係を強調していると感じさせた。

・テキスト2は、議員の登場の際に子育て中の女性議員については、「家族で」などステレオタイプを感じさせる紹介の仕方をしている。船後議員の自宅から当院までのプロセスを映し出すことによって、コミュニケーションは十分に取れるというメッセージではないか。

ニュース報道を分析するには、ジャーナリズムとしてのメディアに課せられた機能にも着目する必要があります。参加者同士の分析と対話を通して、主権者としてどのような情報が必要なのかを互いに発見する機会になりました。(参考『最新 Study Guide メディア・リテラシー入門編』第5章「ニュース報道を読み解く」)

●プログラムの概要～各セッション担当者による報告(2日目)

セッション5. インターネットニュースはどう構成されているか(担当:森本洋介)

本セッションは基本概念1、2、7、8について学ぶことを念頭に置いて、特にインターネットのポータルサイトを対象に分析を行いました。2日目の最初のセッションということで、最初に個人のブロガーによって提示された報道内容と、新聞のオンライン版で報告された報道内容の間に違いがあるかどうかについて参加者に話し合ってもらいました。その後、本題の分析内容であるポータルサイトの新着(注目)ニュースのページをワークシートに書き取る作業を行いました。グループ内では各自で異なるサイトを分析するようにルールを設けましたが、グループ間でも異なるサイトを多く分析する人が多く(よくあるのは誰かがYahooを扱ってそれ以外は有名どころのポータルサイトを扱うケース)、グループの発表でもいろいろな発見があり、有意義でした。特にニュースソースについて分析する際に、一般的には通信社や雑誌社からニュースを転載していますが、Googleのポータルサイトでは他

のポータルサイトのニュースをそのポータルサイト経由で掲載するという（例えば Yahoo にある、ある新聞社の記事）、「又貸し」のような掲載の仕方もあり、ネット上のニュースのあり方について、普段あまり気にしないニュースソースについて発見がありました。

次の活動である、最初に分析したポータルサイトのニュースから各自 1 つを選んで SNS とのリンクなどについて分析する作業では、サイトごとに直接コメントが送れるもの、Facebook など他の SNS を通じてニュースを拡散したりコメントを書き込めるようにしたりしているものなど、これもまたサイトによって多様でした。各グループではこの状況を深く考察し、当初予定していなかった基本概念 4 の商業主義的なところにまで話し合いが及んだグループもありました。初日に扱ったテレビニュースや新聞と異なり、インターネットニュースではユーザーも「現実」の構成に関わっていることを、参加者の方々には理解していただけたのではないかと思います。

セッション 6. ニュース分析の新たな方向を検討する（担当：高橋恭子）

現在は真実が犠牲になる「ポスト真実」の時代といわれます。メディアのゲート・キーパー（門番）としての機能は弱まり、アルゴリズムや集合知、「いいね」やリツイートが取って代わったという見方もあります。誰もがメディアの発信者にもなる今日、ジャーナリストは、私たち市民にも彼らと同様に情報の正確性や信頼性を判断するスキルを求めています。それでは、どのようなスキルをいかに獲得すればいいのでしょうか。米国では、フェイクニュースに立ち向かう対抗策として、「ニュース・リテラシー」が注目を集めています。「ニュース・リテラシー」はジャーナリストらが中心になって、大学の講座や中高生対象のワークショップで実践されています。

セッション 6 では、ニューヨーク州立大学ストーニーブルック校が開発した「ニュース・リテラシー」プログラムの一部を実践しました。TBS 報道特集「あす投票の参院選 投票率を上げるために」（2019 年 7 月 20 日放送）をテキストに、ニュースの要約、エビデンス（証拠、根拠、証言）と情報源の検証と評価に加え、取り上げられたテーマの（歴史的、文化的、政治的）全体像が示されているか、欠けている視点があれば、どのようなものかをグループで話し合いました。

セッションのねらいは次の 3 つです。

- 1 ニュースの情報源の評価やエビデンスの内容を検証することでニュースを深く理解する。
- 2 ジャーナリズムと意見、主張を判別する。
- 3 メディア・リテラシーとニュース・リテラシーの異なるアプローチについて理解する

セッション参加者からは、ニュース・リテラシーを実践した今回のワークショップについて、「ニュース全体がうまくまとまっているように見えても、ニュースの最初と結末に一貫性がないことや、根拠を示すデータや専門家の発言の出所についてよく考えなくてはいけないと思った」「情報の質を踏まえた分析ができた」「文字にして根拠を検証すると、確実な情報が少ないと思った」等のコメントが寄せられました。

セッション7. SNS時代にニュースをどう読み解くか (担当: 田島知之)

セッション7ではセッション6をふまえて、SNS時代のニュース分析の方法、これからのニュースのあり方や市民ジャーナリズム、またこれからメディアとどのように向き合っていくことが重要なのか、といったことについて、グループで話し合い、セミナーで学んだことをふりかえりました。

●若い参加者のコメントより

・20代女性Sさん (社会人)

本日はありがとうございました。アカデミックなお話も伺うことができ、毎年背筋がのびる思いです。教員という立場で、ということだけでなく、私自身が市民の一員として大切なリテラシーだと感じています。語り合う中で見えてくるものがたくさんあると思いました。来年もぜひ参加させてください。

・20代男性Nさん (社会人)

今回のセミナーを通して特にニュース・リテラシーについて考えを深めることができた。ニュースで切り取られた「現実」が何かを考えることができたとともに、その中で取り上げられた情報が「現実」を構成するのに、本当に適しているものなのかを考える視点も必要なのだということがわかった。また、市民ジャーナリズムの中にも、そのメリットを最大限に活用して情報を発信している人がいることがわかり、もっと、メディアを観る目を育てていきたいと思った。

・20代女性Nさん (学生)

勉強になることばかりだったのと同時に、同世代、異なる世代、学生、社会人とさまざまな人と交流することができて、とても楽しかったです。情報にかかわる時に、作り手、受け手という関係だけでなく、消費する側でもあり、同時に発信する側でもあると感じました。日々発展し、情報であふれる社会においては学び続けていくことが大切で、身近な人ともメディアについて話したり、意見を聞いたりしたいと思いました。